

国内の畜産物の需給動向

牛肉

5年12月の牛肉生産量、前年同月比0.5%減

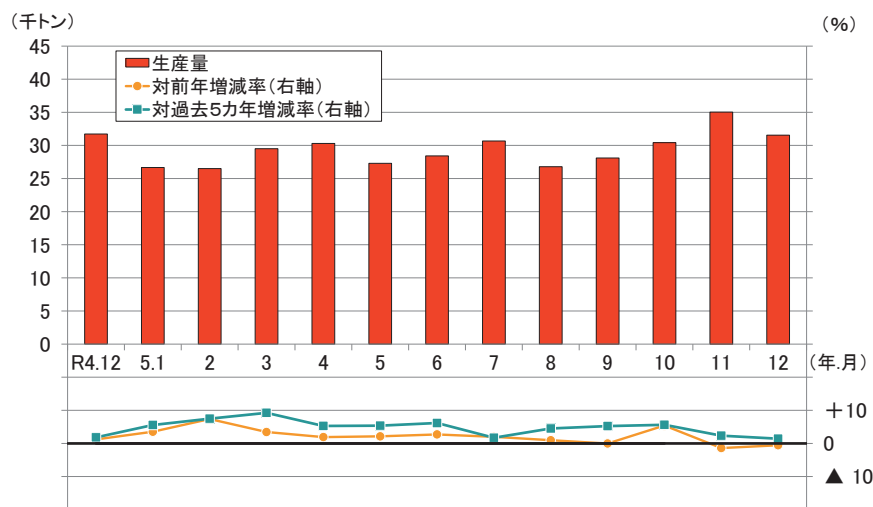
生産量

令和5年12月の牛肉生産量は、3万1556トン（前年同月比0.5%減）と前年同月をわずかに下回った（図1）。品種別では、和牛は1万6029トン（同1.1%増）、交雑種は

8543トン（同1.5%増）と、ともに前年同月をわずかに上回った一方、乳用種は6669トン（同5.0%減）と前年同月をやや下回った。

なお、過去5カ年の12月の平均生産量との比較では、1.4%増とわずかに上回る結果となった。

図1 牛肉生産量の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：部分肉ベース。

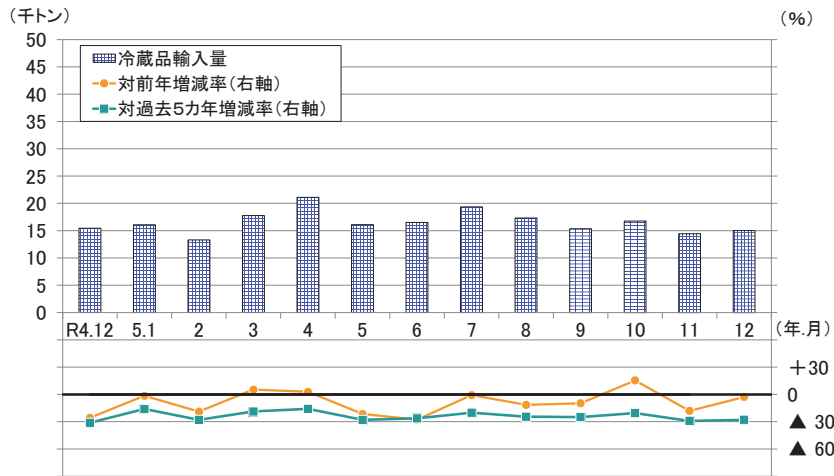
輸入量

12月の輸入量は、冷蔵品は、国内需要が低迷下にある中、生産量の増加から豪州産輸入量が増加したものの、主要国を含む多くの輸入先からの輸入量が少なかったことなどから、1万5016トン（前年同月比2.7%減）と前年同月をわずかに下回った（図2）。冷凍品は、国内の輸入品在庫量が多いことなど

から、主要国を含む多くの輸入先からの輸入量が少なく、2万1055トン（同4.2%減）と前年同月をやや下回った（図3）。この結果、全体では3万6092トン（同3.6%減）と前年同月をやや下回った。

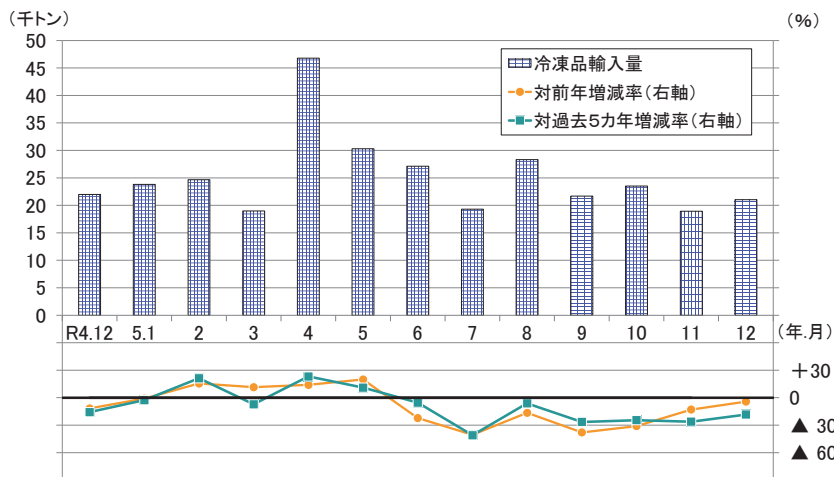
なお、過去5カ年の12月の平均輸入量との比較でも、冷蔵品は27.9%減、冷凍品は18.3%減と、ともに大幅に下回る結果となった。

図2 冷蔵牛肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

図3 冷凍牛肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

家計消費量等

12月の牛肉の家計消費量（全国1人当たり）は226グラム（前年同月比0.7%増）と前年同月をわずかに上回った（総務省「家計調査」）。

なお、過去5カ年の12月の平均消費量との比較では、8.6%減とかなりの程度下回る結果となった。

12月の外食産業全体の売上高は、新型コロナウイルス感染症の5類感染症移行後初めての年末となり、天候にも恵まれ、忘年会や

クリスマス、帰省などで外食需要が好調に推移した他、インバウンド需要も引き続き好調で、前年同月比11.0%増と前年同月をかなり大きく上回った（一般社団法人日本フードサービス協会「外食産業市場動向調査」）。このうち、食肉の取り扱いが多いとされる業態として、ハンバーガー店を含むファーストフードの洋風は、期間限定品やクリスマス需要が好調で、同9.7%増と前年同月をかなりの程度上回った。また、牛丼店を含むファーストフードの和風も、テレビコマーシャルの効果もあり、季節限定メニューの売れ行きが

好調で、同13.6%増と前年同月をかなり大きく上回った。ファミリーレストランの焼き肉は、引き続き食べ放題業態が好調で、忘年会需要の復活もあり、同11.0%増と前年同月をかなり大きく上回った。

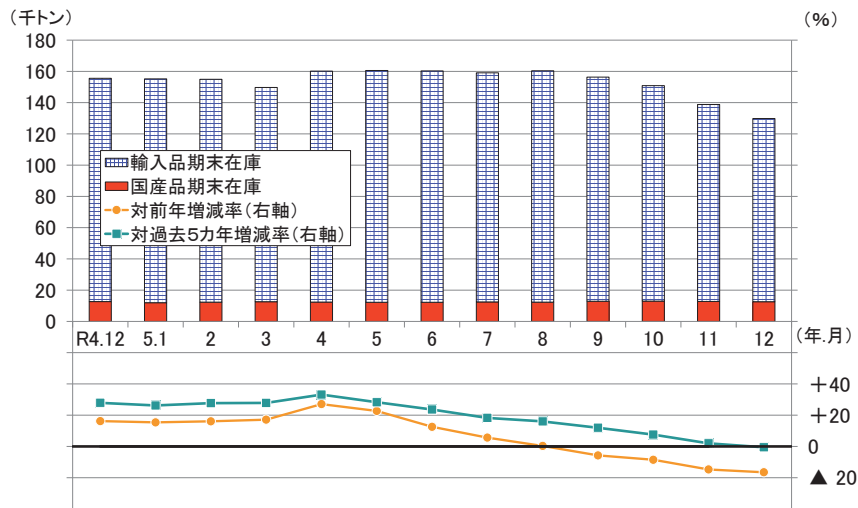
推定期末在庫・推定出回り量

12月の推定期末在庫は、12万9826トン（前年同月比16.5%減）と前年同月を大幅に

下回った（図4）。このうち、輸入品は11万7207トン（同18.0%減）と前年同月を大幅に下回った。

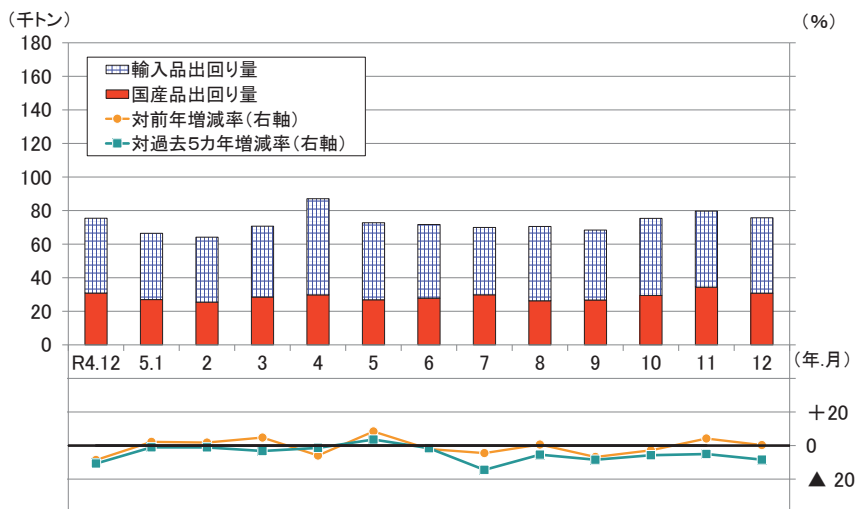
推定出回り量は、7万5694トン（同0.3%増）と前年同月並みとなった（図5）。このうち、国産品は3万833トン（同0.1%減）と前年同月並み、輸入品は4万4861トン（同0.6%増）と前年同月をわずかに上回った。

図4 牛肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図5 牛肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

(畜産振興部 大内田 一弘)

豚 肉

5年12月の豚肉生産量、前年同月比1.9%増

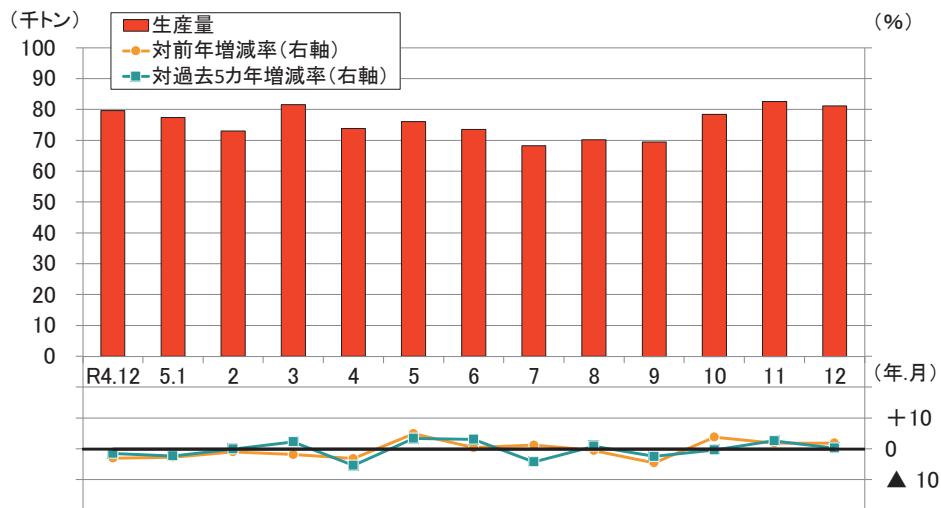
生産量

令和5年12月の豚肉生産量は、8万1152トン（前年同月比1.9%増）と前年同月を

わずかに上回った（図1）。

なお、過去5カ年の12月の平均生産量との比較では、0.3%増と同水準という結果となった。

図1 豚肉生産量の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：部分肉ベース。

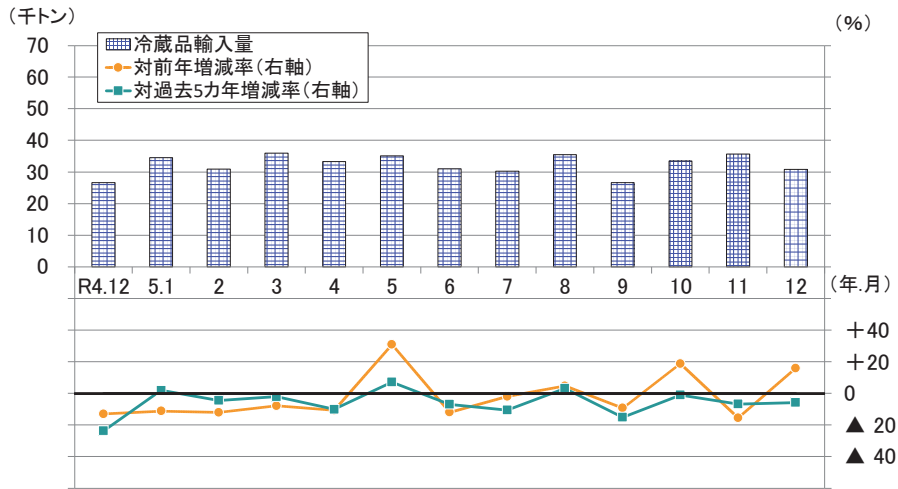
輸入量

12月の輸入量は、冷蔵品は、前年同月のカナダ産の輸入量が少なかったことなどから、3万851トン（前年同月比15.9%増）と前年同月をかなり大きく上回った（図2）。また、冷凍品は、国内の輸入品在庫が多いことに加え、欧州産、メキシコ産の現地相場高

の影響などから、3万6810トン（同12.8%減）と前年同月をかなり大きく下回った（図3）。この結果、全体でも6万7663トン（同1.7%減）と前年同月をわずかに下回った。

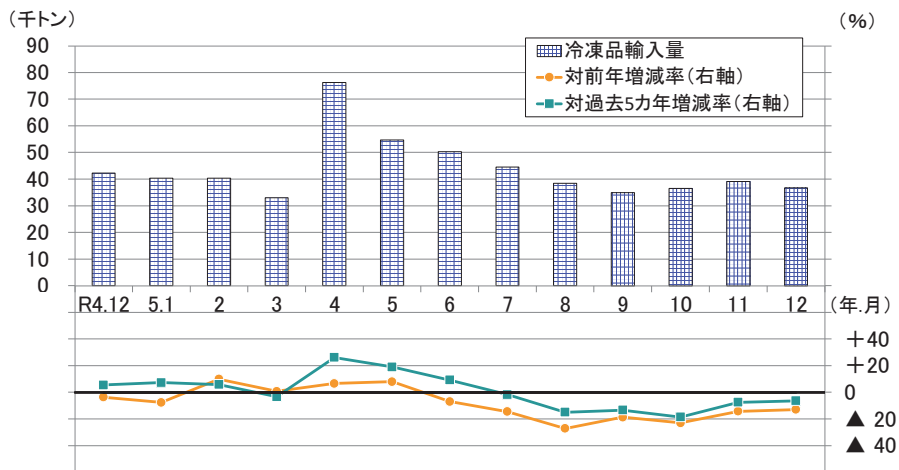
なお、過去5カ年の12月の平均輸入量との比較では、冷蔵品は5.9%減とやや、冷凍品は6.3%減とかなりの程度、いずれも下回る結果となった。

図2 冷蔵豚肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

図3 冷凍豚肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

家計消費量

12月の豚肉の家計消費量（全国1人当たり）は、699グラム（前年同月比1.7%増）と前年同月をわずかに上回った（総務省「家計調査」）。

なお、過去5カ年の12月の平均消費量との比較でも、4.0%増とやや上回る結果となった。

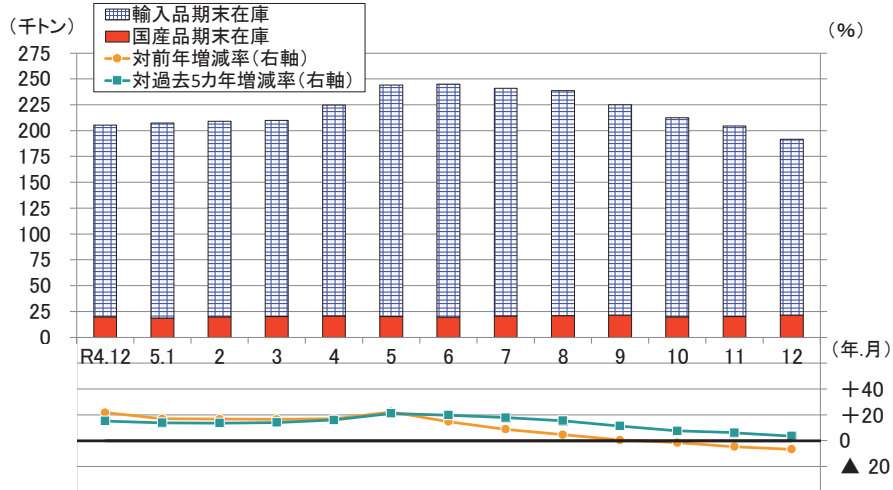
推定期末在庫・推定出回り量

12月の推定期末在庫は、19万1501トン（前年同月比6.7%減）と前年同月をかなりの程度下回った（図4）。このうち、輸入品は、17万120トン（同8.2%減）と前年同月をかなりの程度下回った。

推定出回り量は、16万1570トン（同2.6%増）と前年同月をわずかに上回った（図5）。このうち、国産品は7万9774トン（同

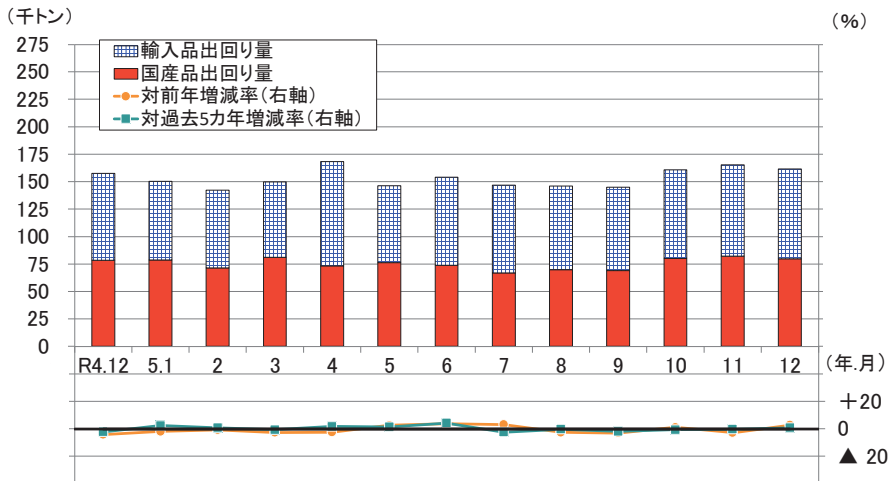
1.7%増)とわずかに、輸入品は8万1796
 トン(同3.5%増)とやや、いずれも前年同
 月を上回った。

図4 豚肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図5 豚肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

(畜産振興部 大西 未来)

鶏肉

5年12月の鶏肉生産量、前年同月比1.2%増

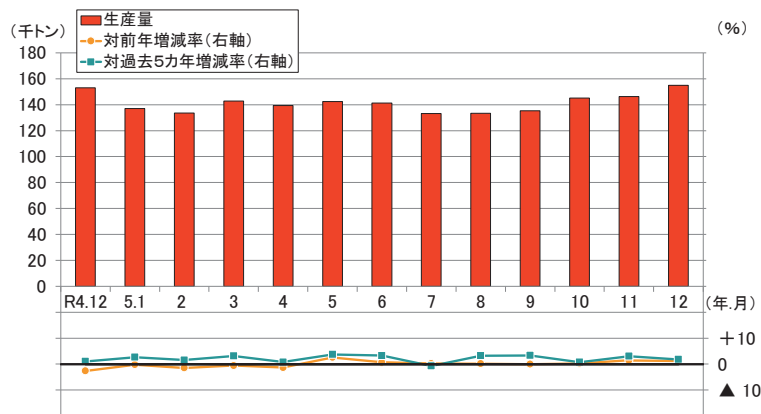
生産量

令和5年12月の鶏肉生産量は、15万4957トン（前年同月比1.2%増）と前年同

月をわずかに上回った（図1）。

なお、過去5カ年の12月の平均生産量との比較でも、1.8%増とわずかに上回る結果となった。

図1 鶏肉生産量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ
注1：骨付き肉ベース。
注2：成鶏肉を含む。

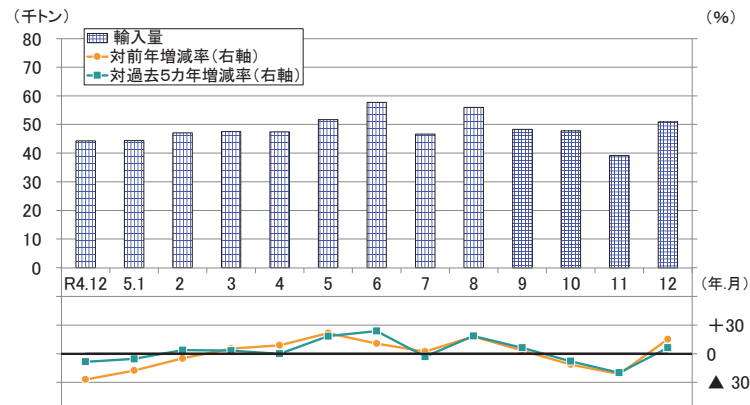
輸入量

12月の輸入量は、ブラジル産については同国において発生した高病原性鳥インフルエンザ（HPAI）の影響が緩和されたことに加え、タイ産への引き合いも増えていることに

より、輸入量が増加したことなどから、5万981トン（前年同月比15.1%増）と前年同月をかなり大きく上回った（図2）。

なお、過去5カ年の12月の平均輸入量との比較でも、6.4%増とかなりの程度上回る結果となった。

図2 鶏肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：鶏肉以外の家きん肉を含まない。

家計消費量

12月の鶏肉の家計消費量（全国1人当たり）は、652グラム（前年同月比9.4%増）と前年同月をかなりの程度上回った（総務省「家計調査」）。

なお、過去5カ年の12月の平均消費量との比較でも、10.9%増とかなりの程度上回る結果となった。

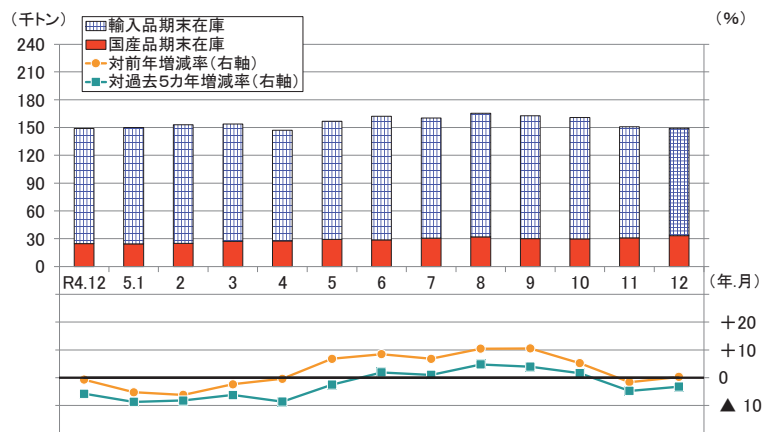
推定期末在庫・推定出回り量

12月の推定期末在庫は、14万9211トン

（前年同月比0.3%増）と前年同月並みとなった（図3）。このうち、輸入品は11万5660トン（同6.9%減）と前年同月をかなりの程度下回った。

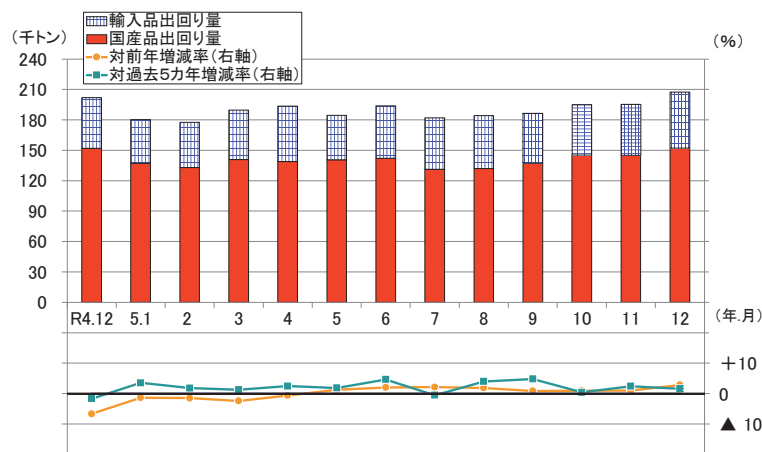
推定出回り量は、20万7560トン（同2.8%増）と前年同月をわずかに上回った（図4）。このうち、国産品は15万2279トン（同0.3%増）と前年同月並み、輸入品は5万5281トン（同10.5%増）と前年同月をかなりの程度上回った。

図3 鶏肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図4 鶏肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

（畜産振興部 田中 美宇）

令和5年の牛および豚枝肉の格付結果

公益社団法人日本食肉格付協会は、令和5年（1～12月）の「牛枝肉格付結果（種別・性別）」および「豚枝肉格付結果」（令和6年1月24日版）を公表した。

牛枝肉の格付実施率は、成牛のと畜頭数

（109万8532頭）に対して84.3%と前年同となり、豚枝肉の格付実施率は、と畜頭数（1640万7211頭）に対して77.1%と前年から0.2ポイント減少した。以下、畜種ごとの格付結果を紹介する。

【牛肉】「A-5」の格付頭数は4年連続で15等級の中で最多に

5年の牛のと畜頭数は109万8532頭と前年比で1.5%増加した。品種別に見ると、和牛は50万6653頭（前年比3.4%増）、乳用牛は31万9411頭（同3.4%減）、交雑牛は26万1571頭（同5.2%増）、外国種などを含むその他の牛は1万897頭（同17.4%減）となった。

このような中、同年の牛枝肉の総格付頭数は、同年の成牛のと畜頭数が増加（同1.5%増）したこと、92万6138頭（同1.6%増）と前年をわずかに上回った。品種別の格付頭数を見ると、「和牛」（48万7448頭）は同3.4%増、「交雑牛」（24万5411頭）は同4.6%増と前年を上回った一方、「乳用牛」（18万2584頭）は同5.0%減、外国種などを含む「その他の牛」（1万695頭）は同21.6%減と前年を下回った。

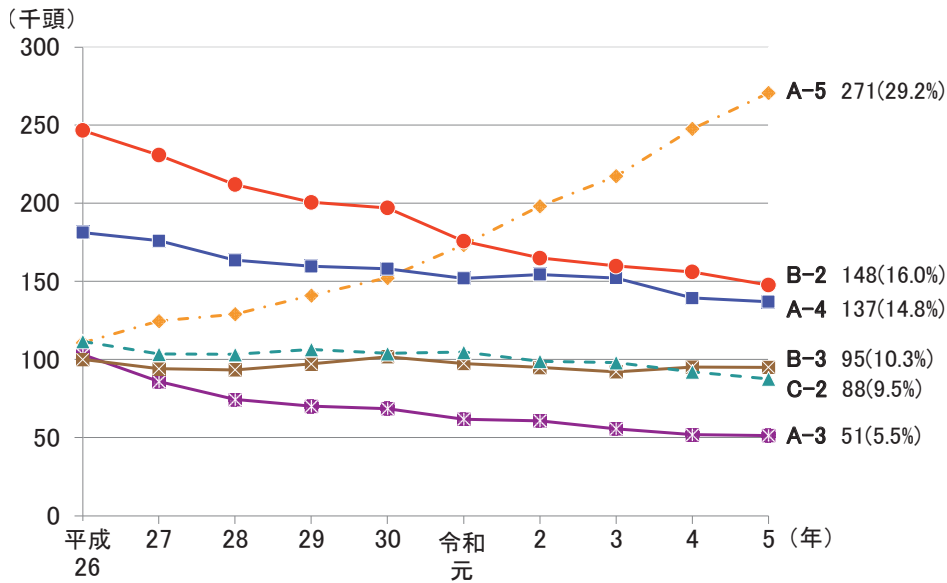
牛肉は、「歩留等級（A～C）」と「肉質等級（5～1）」を組み合わせた15段階で格付されている。歩留等級とは、枝肉から得られる部分肉の割合を評価し、部分肉歩留が標準

より良いものはA、標準のものはB、標準より劣るものはCと判定される。また、肉質等級とは、（1）脂肪交雑（サシ）（2）肉の色沢（3）肉の締まりおよびきめ（4）脂肪の色沢と質—の4項目を5段階で評価し、四つの項目中、最も低い等級が肉質等級として判定される。

5年の全体における等級ごとの格付頭数の推移を見ると、「A-5」が27万700頭（同9.3%増）と前年をかなりの程度上回り、4年連続で15等級の中で最多となった。全体に占める割合は、29.2%となり、前年から2.0ポイント増加した（図1）。「A-5」の内訳を見ると、和牛去勢が62.5%、和牛めすが36.1%と、和牛で約99%となっている。

「A-5」に次いで多い「B-2」は、14万7755頭（前年比5.3%減）と前年をやや下回り、減少傾向が続いている。「B-2」のうち約4割を乳用牛去勢が占めており、乳用牛のと畜頭数の減少が「B-2」の格付頭数の減少の主な要因の一つとみられる。

図1 主要な等級別格付頭数の推移

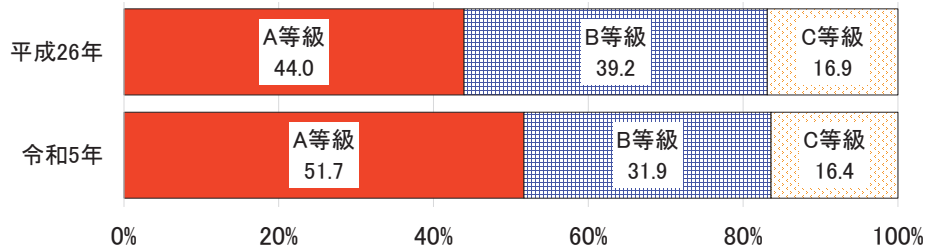


資料：(公社)日本食肉格付協会
注：かっこ内は構成比。

5年の歩留等級別の格付構成比を見ると、全体に占める「A等級」の割合は51.7%と、平成26年と比較すると7.7ポイント増加した(図2)。また、肉質等級別の格付構成比

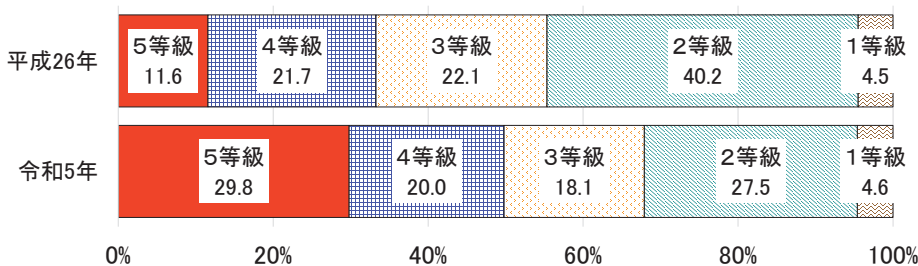
を見ると、全体に占める「5等級」の割合は29.8%と26年から18.2ポイント増加した一方、「4等級」は26年から1.7ポイント減少の20.0%となった(図3)。

図2 歩留等級別の格付構成比の推移



資料：(公社)日本食肉格付協会
注：端数処理の関係から合計と内訳が一致しない。

図3 肉質等級別の格付構成比の推移



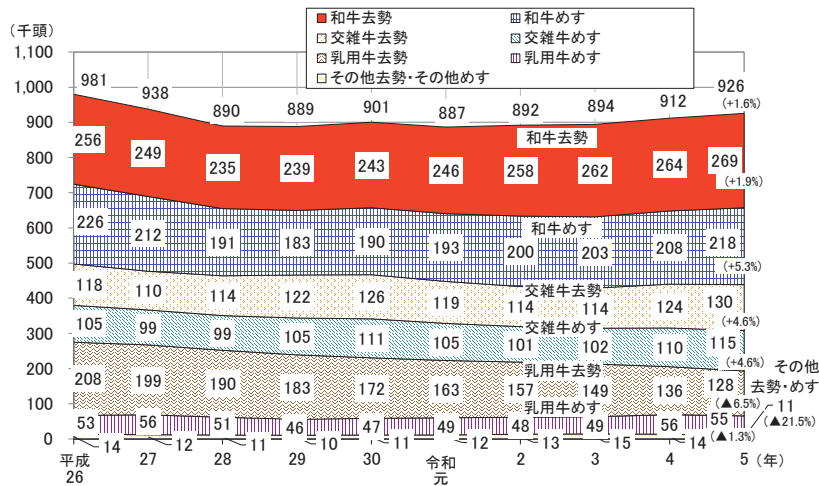
資料：(公社)日本食肉格付協会
注：端数処理の関係から合計と内訳が一致しない。

令和5年の品種別・性別の頭数を見ると、和牛去勢が26万8779頭（前年比1.9%増）と最も多く、次いで和牛めすが21万8494頭（同5.3%増）、交雑牛去勢が13万159頭（同4.6%増）、乳牛去勢が12万7651頭（同6.5%減）、交雑牛めすが11万5217頭（同

4.6%増）となった（図4）。

なお、品種別の割合は、和牛が52.6%（同0.9ポイント増）、交雑牛が26.5%（同0.8ポイント増）、乳用牛が19.7%（同1.3ポイント減）、その他の牛が1.2%（同0.3ポイント減）となった。

図4 品種別・性別格付頭数の推移



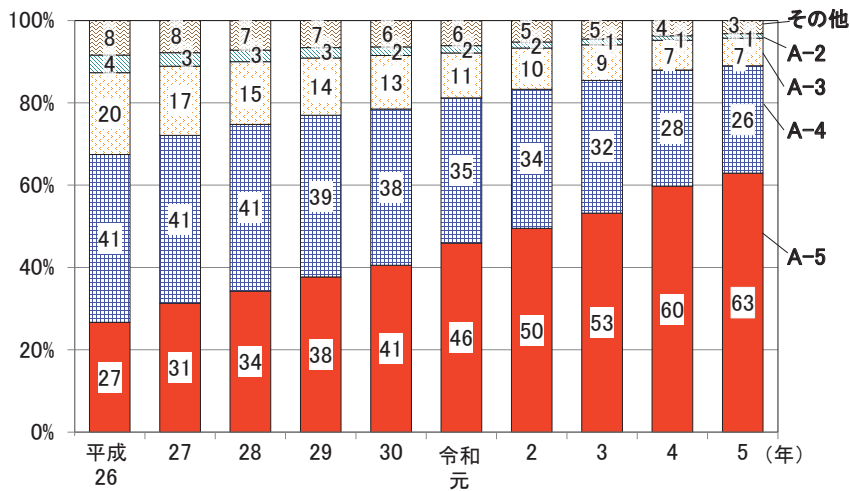
資料：(公社)日本食肉格付協会
注：カッコ内は前年比。

5年の品種別・性別ごとの格付構成割合を見ると、和牛去勢は、「A-5」が63.0%と、前年から3.3ポイント増加した一方、「A-4」は26.1%と同2.1ポイント、「A-3」

は6.7%と同0.5ポイントそれぞれ減少した（図5）。

また、和牛去勢全体に占める「A等級」の割合は、96.8%（同0.5ポイント増）となった。

図5 牛枝肉格付構成割合の推移（和牛去勢）

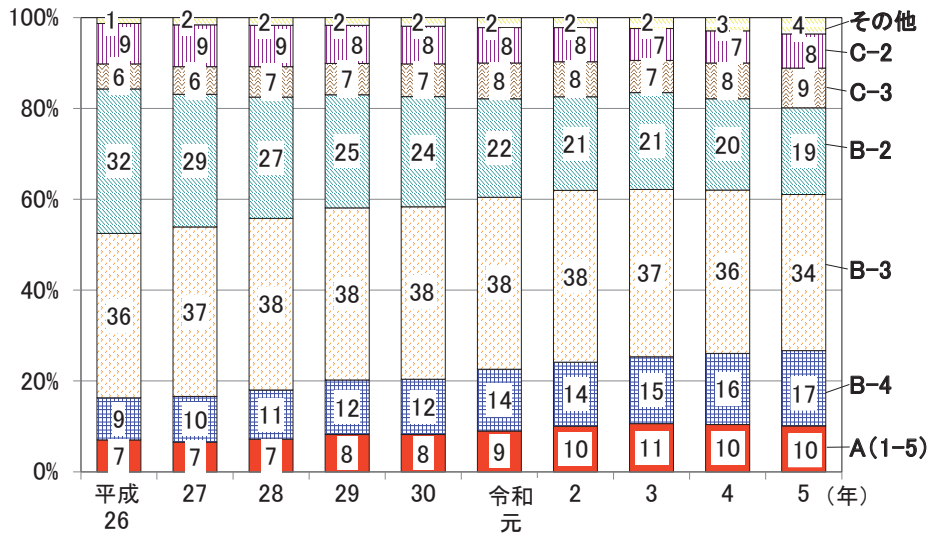


資料：(公社)日本食肉格付協会
注：端数処理の関係から内訳の合計が100%にならない場合がある。

交雑牛去勢は、「B-3」が最も多く、34.4%と前年から1.6ポイント、「B-2」も19.1%と同1.0ポイントそれぞれ減少した

一方、「B-4」は16.6%と同0.9ポイント増加した（図6）。

図6 牛枝肉格付構成割合の推移（交雑牛去勢）

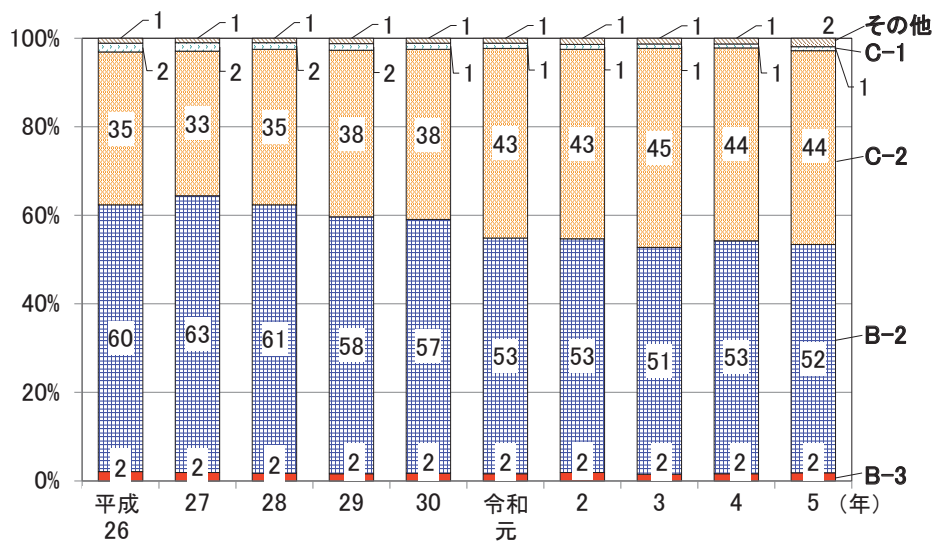


資料：（公社）日本食肉格付協会
注：端数処理の関係から内訳の合計が100%にならない場合がある。

乳用牛去勢は、「B-2」が最も多く、51.6%と同1.0ポイント減少した一方、「C-2」は43.8%と同0.3ポイント増加した（図7）。

「C-2」は43.8%と同0.3ポイント増加した（図7）。

図7 牛枝肉格付構成割合の推移（乳用牛去勢）



資料：（公社）日本食肉格付協会
注：端数処理の関係から内訳の合計が100%にならない場合がある。

【豚肉】 5年の格付構成比、「上」が52.4%、「中」が32.0%

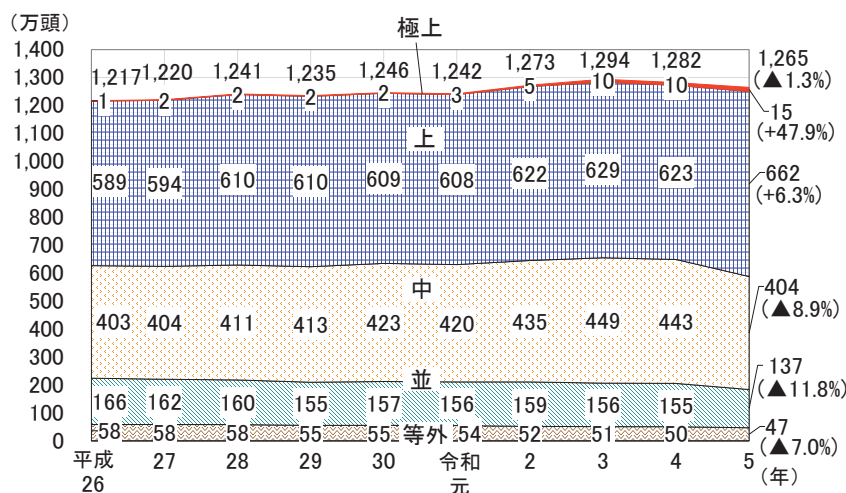
豚肉は、枝肉の重量および背脂肪の厚さ、外観（均称、肉づき、脂肪付着、仕上げ）、肉質（肉の締まりおよびきめ、肉の色沢、脂肪の色沢と質、脂肪の沈着）の基準に照らして、「極上」「上」「中」「並」「等外」の5等級に格付される。なお、5年1月より26年ぶりに改正された豚枝肉取引規格が適用されている^(注)。

5年の豚枝肉の総格付頭数は、1264万7053頭（前年比1.3%減）と前年をわずかに

下回った（図8）。等級別の格付頭数を見ると、「上」が662万2292頭（同6.3%増）と最も多く、次いで「中」が404万2079頭（同8.9%減）、「並」が136万8487頭（同11.8%減）、「等外」が46万8321頭（同7.0%減）、「極上」は14万5874頭（同47.9%増）となった。

（注）『畜産の情報』2023年9月号「豚肉取引規格の改正と新たな情報提供サービスについて」（https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002896.html）を参照されたい。

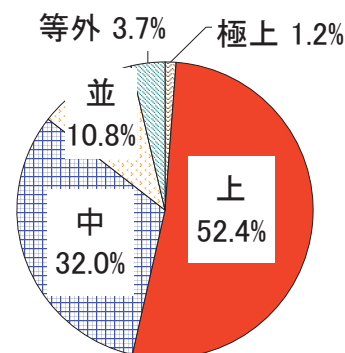
図8 豚枝肉等級別格付頭数の推移



資料：（公社）日本食肉格付協会
注：カッコ内は前年比。

5年の等級別の格付構成比を見ると、「上」が52.4%（同3.8ポイント増）と最も多く、次いで「中」が32.0%（同2.6ポイント減）、「並」が10.8%（同1.3ポイント減）、「等外」が3.7%（同0.2ポイント減）、「極上」が1.2%（同0.4ポイント増）となった（図9）。等級別の格付構成比は「極上」と「上」を合わせると全体の5割以上を占めた。

図9 等級別の格付構成比



資料：（公社）日本食肉格付協会
注：端数処理の関係から内訳の合計が100%にならない場合がある。

（畜産振興部 田中 美宇）

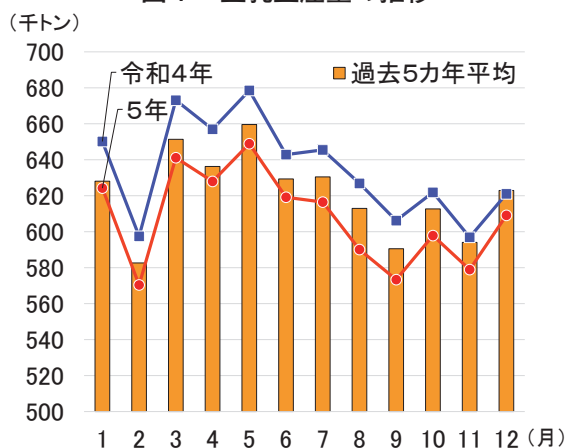
牛乳・乳製品

5年12月の生乳生産量、前年同月比1.9%減

12月の北海道の生乳生産量、前年同月比0.8%減

令和5年12月の生乳生産量は、60万9098トン（前年同月比1.9%減）と前年同月をわずかに下回り、17カ月連続で前年同月を下回った（図1）。地域別に見ると、北海道は34万6685トン（同0.8%減）、都府県は26万2413トン（同3.4%減）とともに前年同月を下回った。北海道は16カ月、都府県は17カ月連続でそれぞれ前年同月を下回ったが、いずれも減少率は縮小した。

図1 生乳生産量の推移



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

12月の生乳処理量を用途別に見ると、牛乳等向けは、30万3178トン（同2.1%減）と前年同月をわずかに下回った。このうち、業務用向けについては、2万7754トン（同0.04%減）と前年同月並みとなった。

乳製品向けは、30万2159トン（同1.8%減）と前年同月をわずかに下回り、17カ月

連続で前年同月を下回った。これを品目別に見ると、クリーム向けは、6万2983トン（同1.2%減）と前年同月をわずかに下回り、チーズ向けは、3万6845トン（同10.3%減）と前年同月をかなりの程度下回った。脱脂粉乳・バター等向けは、16万2338トン（同0.2%増）と前年同月並みとなった（農畜産業振興機構「交付対象事業者別の販売生乳数量等」）。

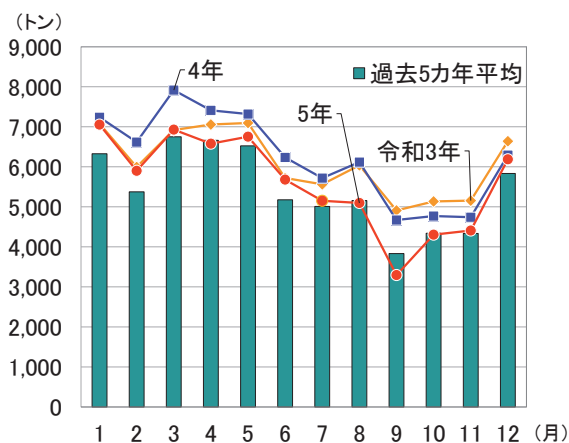
12月の牛乳等の生産量を見ると、飲用牛乳等のうち、牛乳は24万6310キロリットル（同0.8%減）と前年同月をわずかに下回り、成分調整牛乳は1万7858キロリットル（同8.3%減）と前年同月をかなりの程度下回った。加工乳は、1万4345キロリットル（同8.9%増）と前年同月をかなりの程度上回った。

乳製品のうち、クリームは1万861トン（同1.6%減）と前年同月をわずかに下回った。

12月末のバター在庫量、前年同月比34.1%減

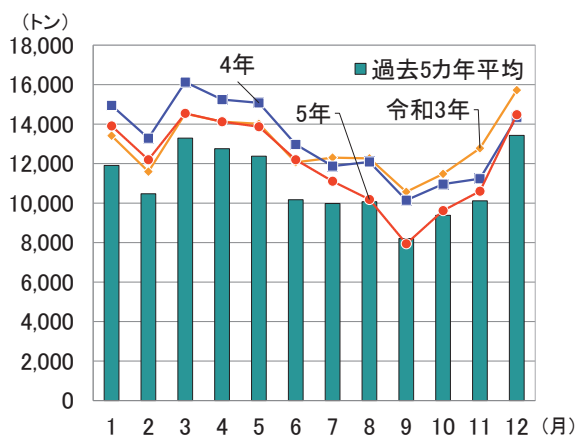
12月のバターの生産量は、6188トン（前年同月比1.7%減）と前年同月をわずかに下回った（図2）。出回り量は8760トン（同15.8%減）と前年同月をかなり大きく下回った（農畜産業振興機構調べ）。12月末の在庫量は、2万321トン（同34.1%減）と前年同月を大幅に下回り、20カ月連続で前年同月を下回った（図3）。

図2 バターの生産量の推移



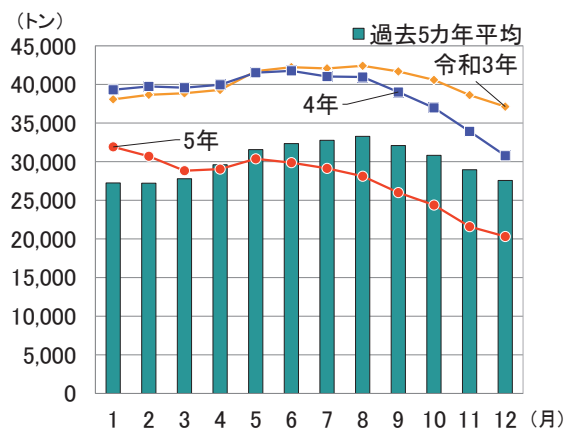
資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

図4 脱脂粉乳の生産量の推移



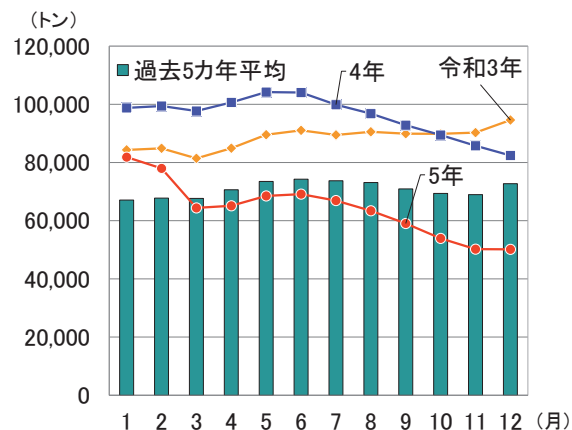
資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

図3 バターの在庫量の推移



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

図5 脱脂粉乳の在庫量の推移



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

12月末の脱脂粉乳在庫量、前年同月比39.1%減

12月の脱脂粉乳の生産量は、1万4480トン（前年同月比0.9%増）と18カ月ぶりに前年同月を上回った（図4）。出回り量は1万4539トン（同17.9%減）と前年同月を大幅に下回った（農畜産業振興機構調べ）。12月末の在庫量は、5万158トン（同39.1%減）と前年同月を大幅に下回り、15カ月連続で前年同月を下回った（図5）。

6年度の生乳生産量、733万トンと3年ぶりの増産となる見込み

一般社団法人Jミルクは令和6年1月26

日、「2023、2024年度の生乳及び牛乳乳製品の需給見通しと課題について」を公表した。これによると、5年度の生乳生産量は731万1000トン（前年度比2.9%減）と前年度を下回る見込みとなった（表）。6年度は733万トン（同0.3%増）と3年ぶりの増産となる見込みである。地域別に見ると、5年度は、北海道では416万6000トン（同2.1%減）、都府県では314万5000トン（同4.1%減）とともに前年度を下回る見込みとなっている。6年度は、北海道では422万5000トン（同1.4%増）と前年度を上回る一方で、都府県では310万5000トン（同1.3%減）と前年度を下回る見込みとなっている。

表 生乳生産量の見通し

(単位：千トン、%)

	全国		北海道		都府県	
	生産量	前年度比 (増減率)	生産量	前年度比 (増減率)	生産量	前年度比 (増減率)
令和2年度	7,433	1.0	4,159	1.6	3,275	0.1
3年度	7,647	2.9	4,312	3.7	3,335	1.8
4年度	7,533	▲1.5	4,254	▲1.3	3,279	▲1.7
5年度 (見通し)	7,311	▲2.9	4,166	▲2.1	3,145	▲4.1
6年度 (見通し)	7,330	0.3	4,225	1.4	3,105	▲1.3

資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」、一般社団法人Jミルク「2023、2024年度の生乳及び牛乳乳製品の需給見通しと課題について」(令和6年1月26日公表)

注：令和2～4年度は実績値、5～6年度は見通し。

6年度の輸入枠数量が決定

農林水産省は令和6年1月26日、6年度の指定乳製品等の輸入枠数量を決定した。これによると、6年度の輸入枠は、5年度と同様に世界貿易機関（WTO）において約束している最低数量（カレントアクセス：生乳換算で13万7000トン）にとどめることとした。品目別の輸入量（製品重量）は、脱脂粉

乳は日米貿易協定に基づく750トン以内、ホエイはWTOに基づく4500トン以内、バター・オイルは事業者の要望に基づく185トン以内、残りをバターに8000～約1万トン配分するとした。当機構は、今回設定された輸入枠数量に基づき、需給状況に応じて入札を実施する予定である。

(酪農乳業部 山下 侑真)

鶏卵

1月の鶏卵卸売価格は全日180円で推移

令和6年1月の鶏卵卸売価格（東京、M玉基準値）は、例年、年末年始にかかる加工業者や量販店の休業などにより、産地に滞留した鶏卵が年明けの営業再開に伴い一斉に流通するため、年初の鶏卵相場の始値は大幅に下落する傾向があることから、1キログラム当たり180円（前年同月差100円安、前年同月比35.7%安）と、前年同月を大幅に下回った（図）。また、同価格は4年3月以降、22カ月ぶりに100円台となった。

6年の始値は、5年12月の終値（同245円）

より65円安の同180円となり、その後、加工業者などによる買い入れが進み、荷余り状況が解消することにより、価格が上昇する傾向があるが、当月は価格に変動が生じず、1月末日まで同180円のままで推移した。

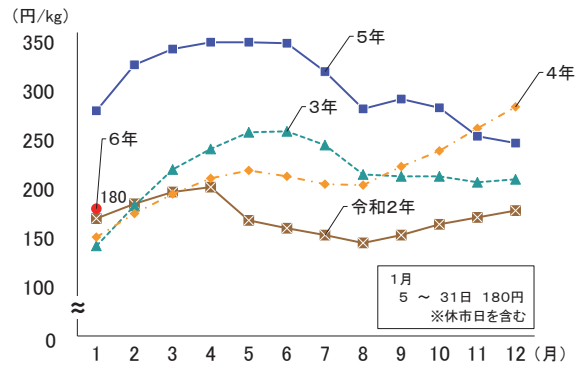
このような中、一般社団法人日本養鶏協会は、6年2月1日時点の鶏卵の標準取引価格（日ごと）が、安定基準価格（同190円）を下回る同174円になったことから同日に成鶏更新・空舎延長事業^(注)が発動になったと発表した。

今後については、供給面は、4年度シーズンの高病原性鳥インフルエンザ発生農場における生産再開が順調に進んでいる一方で、同事業の発動もあることから、今後の動向を注視したい。

需要面では、昨シーズンの鶏卵不足により減少した食品製造事業者などの需要が戻り切っていない一方で、好調なインバウンド需要や、外出、外食の機会など、活発な人流が回復していることから、おでんやすき焼きなど外食店における卵を使用した季節メニューでの販売増や家庭内での鍋物など季節需要の増加が期待される。

(注) 鶏卵生産者経営安定対策事業の一つであり、一般社団法人日本養鶏協会が実施する事業。同事業は、鶏卵の標準取引価格(日ごと)が安定基準価格を下回った日の30日(10万羽未満の生産者は40日)前から標準取引価格(日ごと)が安定基準価格を上回る日の前日までに、更新のために成鶏を出荷し、その後60日以上空舎期間を設けた生産者に対して奨励金を交付するものである。

図 鶏卵卸売価格(東京、M玉)の推移



資料：JA全農たまご株式会社「相場情報」
注：消費税を含まない。

(畜産振興部 生駒 千賀子)